

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 6 日現在

機関番号：32688

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520334

研究課題名(和文) オスカー・ワイルドとドレフュス事件 同性愛・反ユダヤ主義・マスキュリニティ

研究課題名(英文) Oscar Wilde and the Dreyfus Affair; Homosexuality, Antisemitism and Masculinity

## 研究代表者

宮崎 かすみ (MIYAZAKI, Kasumi)

和光大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：10255200

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：ワイルドの作品と生涯を同時代の性科学の発達、同性愛をめぐる文化・社会的状況などを背景にして辿り、評伝として刊行するという課題を達成することができた。近年書き直されたイギリス同性愛史の最新成果を盛り込み、ワイルドの同性愛、および裁判の意味を辿り直し、ワイルド裁判が従来言われていたようなイギリス最初の同性愛裁判ではなく、旧来のソドミー裁判を踏襲したものであるとして書き直した。同性愛の原因としての変質論をめぐる大陸とイギリスのギャップ、さらにイギリスから追放されたワイルドがフランス滞在時に起きたドレフュス事件にかかわりワイルドがドレフュス事件の早期解決に貢献したという新知見も得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This project resulted in the publication of a biography of Oscar Wilde, which, based on new materials, follows the life of Wilde in the context of the social and cultural history of homosexuality and the rise of sexology on the Continent.

Using the recent studies of the history of homosexuality in Britain, the biography revises the Oscar Wilde trial in light of the older concept of sodomy, and disproves Ed Cohen's claim that Wilde's was the first homosexual trial in Britain. It focuses on the degeneration theory adopted by sexologists to explain the cause of homosexuality, whereas Britain did not see the advent of sexology and the new concept of homosexuality before the 1930's. This project also reveals that Wilde contributed to the disclosure of the real culprit of the Dreyfusse affair.

研究分野：英文学

キーワード：オスカー・ワイルド ドレフュス事件 同性愛 ソドミー 性科学 変質論

## 1. 研究開始当初の背景

申請者はそれまでも、同性愛アイデンティティの成立についてワイルド自身のテキストの他、彼を取り巻く人々の著述、評伝、書簡、日記、報道などの資料を分析する研究を続けていた。その成果は様々な形で発表されていたが、それをワイルドの評伝の形で、一つの読み物としてまとめ上げる必要性を痛感するようになった。その理由として第一に、ワイルドの評伝の決定版とされてるエルマンのワイルド伝だが、これは1984年の刊行であり、30年も経過している。日本では平井博氏の著作が決定版として評価が高いが、これも1960年刊行と、すでに半世紀がたっている。この間、ワイルドの伝記においても新事実が明らかになってきているが、のみならず、2000年代以降、イギリス同性愛史の書き換えが活況を呈しており、ワイルドの人生も新しい歴史的背景に置き直したうえで、様々な問題をとらえ直さねばならない時期にきていた。

他方、これまでの研究の過程で、ワイルドがドレフュス事件に深く関わったことを突き止めた。友人のカーラス・ブラッカーがドレフュス事件に関与していたことから、ワイルドにも真相が知らされ彼は秘密を暴露した。これがゾラ等の知る所となり新聞に公表され、ドレフュスの無罪が証明されることとなる。あまり知られていないが、ワイルドはドレフュス事件の解決に大きな影響を与えていたのである。他方、ワイルド本人は冤罪のヒーロー、ドレフュスよりも、エステラージを真犯人と知って共感を寄せ、何度か酒宴を共にして意気投合していた。自分は犯罪者だから彼と同類であるという認識ゆえであった。

本研究課題着想当初は、この興味深い

史実をさらに踏み込み、同性愛とユダヤ性という差別の問題に切り込んでゆくつもりであった。ところが、実際に研究を開始してみると、フランス史を専攻しているわけでもない申請者に、ドレフュス事件を深く扱う困難に直面した。さらに、ワイルドの伝記的事実の書き直しが英米でかなり進んでおり、その最新の成果をフォローするのにかなりの時間とエネルギーを要することがわかった。また、我が国において半世紀ぶりに書き直されるワイルド伝ともなると、相当な準備と書込みが必要であるとの認識に至り、研究に着手したのちに、ワイルドの評伝執筆を中心とすることに方針を変更するに至った。

## 2. 研究の目的

上述したように、本研究計画の第一の目的は、ワイルドの評伝を新書の形式で執筆して刊行することであった。幸いにして、本研究計画に着手する前に中公新書からワイルド評伝を刊行することは決まっていたので、この機会を活かして、英文学者のなかでも異色の才能を誇りつつも、同性愛というスキャンダルにまみれて失脚したワイルドという人物の生涯を、一般の読者にも読みやすく、かつ興味深い読み物として提供することをまずは目指した。と同時に、ワイルドの生涯を決定づける同性愛の性向、それを取り巻く当時の社会事情、同性愛をめぐる思想状況、ヨーロッパにおける文化史などをも盛り込み、なおかつ当時の思想的な大問題であった変質論の文脈をも織り込んだ思想劇を横糸に織り込むことを目指した。つまり、ワイルドの生涯という興味深い読み物のバックグラウンドに、同性愛の諸事情や思想史についての最新

の研究知見を配置するという新しいスタイルの本を書くことを目標としたのである。

研究としては、ワイルドの同性愛裁判をめぐる、近年書き換えられている最新の研究成果をできる限り取り込むことを心掛けた。ヨーロッパ大陸の性科学とは無関係に、独自の展開を見せていたイギリスの同性愛史のなかにワイルド裁判を置き直し、正しい理解にたどり着くことも目指した。イギリスの同性愛史研究では、2000年代半ばから新しい知見が発表され、従来のフーコー・ウィークスの説「ワイルド裁判とそれをめぐる報道によってイギリス社会に同性愛アイデンティティが成立した、ワイルドはイギリス最初の同性愛者である」が塗り替えられている。つまり、ワイルド裁判は、従来からあったソドミー裁判と同じ概念によるもので、1885年の刑法改正によって変わったのは、肛門性交に至らないものも取り締まることができるようになったという拳証の問題にすぎなかったことが研究者によって主張されていた。しかしながら、日本の英文学研究者の間ではこの認識がまったく広まらず、ワイルド裁判がイギリスで最初の同性愛裁判だったという誤った認識が、2013年にこの研究課題の成果であるワイルド伝が刊行されるまで幅をきかせていた。申請者は本研究成果の刊行によって、この状況を打破し、英文学におけるワイルドの理解に正しい歴史認識をもたらさねばならないと考えていた。

このようなイギリスの同性愛史研究の進展によって、研究者の関心は、ワイルド裁判から約二十年さかのぼるステラ・ファニー事件へと移っていた。それに伴い、ワイルド裁判そのものに対する研究は疎かになっていた嫌いがあり、85年の

刑法改正から95年のワイルド裁判に至るイギリスの性科学の発達そのものを歴史研究者たちは分析対象とはしてこなかった。本研究課題は、ワイルド裁判を、新たな性科学研究の歴史から見直し、その歴史的位相を書き直すことをも目指した。

### 3. 研究の方法

ワイルドの生涯をまとめるために、既に刊行された評伝を可能な限り入手して読み込んだうえで、内容を凝縮して自分なりにまとめあげた。ワイルドの評伝は膨大な数に上り、しかもその多くは絶版であるため、古書店を探しても入手できないものは、ブリティッシュ・ライブラリーで閲覧した。それらの評伝を何冊も読むことで、生涯をストーリーとして頭に入れることができた。

そのほかに一次資料としてカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校アンドリュー・クラーク図書館が所蔵する手稿資料を利用した。この資料はアンドリュー・クラークがワイルドの遺児であるヴィヴィアン・ホランドから購入したものを中心に、ワイルドおよび周辺の人物の膨大な数の書簡を含むものである。これを利用するためにロサンゼルスに滞在（約一週間）し、活用できる可能性のあるものをすべて写真撮影して記録した。手稿は大変読みにくく、判読に時間がかかるため、撮影した画像は帰国してから印刷して解読し、評伝の事実新しく織り込める知見を織り込んで、独自の観点から評伝を書き上げることができた。

さらに、ワイルドは図らずも同性愛の本質主義を退けることになる「仮面の理論」を振りかざして、当時の性科学の次元の数歩前を先取りしていたと現在では理解されているが、それを当人がどれほど意識していたかについても探っていく。今ではワ

イルドのモダニズム性が時代を先取りしていたと言われている。しかし果たしてそう言えるのか、逆に後戻りだったのではないか。そしてそれをワイルド本人が意識していたのか、いなかったのか。こうした点について、ワイルドの残した文学作品以外のテキスト、主として書簡を使って分析した。

背景の思想状況をできるだけ豊かに再現するために、ワイルドと同時代の思想家や関係者の著作を多数読み込んだ。とくにワイルドとも個人的な親交のあったウォルター・ペイターとジョン・アディントン・シモンズ思想・学問については、著作、研究書を読んでいった。そのルネサンス研究がワイルドに影響を与えたことからしても、シモンズについては特に重視し、当時のルネサンス研究ブームも含めて文献などを当たって切り込んでいった。結果的に当時のルネサンス研究が唱えていた、ルネサンスを人間性が十全に発揮された結果として「犯罪」をも許容する人間観をもっていたという見解が、ワイルドの人間観に深く影響していることを突き止め、評伝全体の核にすることができた。

ワイルドとドレフュス事件との関わりを検証するにあたっては、ワイルドの書簡や、当時者であったクリス・ヒーラーが書いた手記などを使った。ドレフュス事件の分析においても、自分が犯罪者というワイルドの意識を中心に据えることにより、本全体の主張に一貫性が出たと言える。

#### 4. 研究成果

本研究課題の目的であったワイルド評伝の刊行は、無事に計画期間内に果たすことができた。学術書ではなく、中公新書という一般向けの読み物の形で本格的なワイルドの評伝を出したことは、高く評価されている。本書は、『琉球新報』『京都新聞』などの地方紙に海野弘氏による書評が掲載さ

れたほか、『週刊朝日』『ヴィクトリア朝文化研究』でもずれも好意的に紹介された。そのほか、インターネット上でも大変好意的な評価が多く、一般読者に、ワイルドの生涯の面白さを広く届けるといふ所期の目的は達成されたと言ってよいと自負している。以下はアマゾンのレビューである。「平井博（1960）以来の日本語による本格的なワイルド評伝が新書版で出た。本書はしっかりとしたりサーチに裏付けられているのみならず、語り口も実にうまい。ただでさえ面白いワイルドの人生がますます興味深く浮かび上がる」。

他にも、「ヨーロッパのゲイ文化史の教科書としても素晴らしい」とか、「日本人研究者が日本人読者のために外国人作家の評伝を書くことの意義を体現している」という評価もあった。そこでは「科研費の成果という点も素晴らしい」と書かれていたことから、最新の研究を踏まえた外国作家の評伝を一般読者にも読みやすい上質の読み物とするにあたって、科研費を使わせていただくことの意義が認められたと考えている。

そのほか、UCLAのアンドリュー・クラーク記念図書館でのリサーチの結果、ワイルドの長男、シリルが日本に来た際に受領した京都御所の拝観許可を発見した。これは今まで誰からも言及されたことのない新資料の発見であり、この成果も評伝に取り込んだ。これまでも何人もの評伝作家がその資料を閲覧してきたに違いないが、日本語を読めないためにこの資料の存在と意義が認められていなかった。まさに日本人研究者がワイルド伝を書くという意義があったと言える自負している。

評伝にも織り込んだことではあるが、本研究課題はワイルド裁判の歴史的位相を検証するという学術的課題も負っていた。その点でも、ワイルド裁判前後のイギリスの性科学事情を調べ、ハヴロック・エリスへ

と至る同性愛研究の系譜を明らかにした。これについては、日本ワイルド協会で招聘された講演でその成果を披露し、それを論文としてまとめている最中であり、今年度の学会誌に掲載される予定である。

また、申請者の一貫した研究対象である夏目漱石が、ワイルドの生涯や作品からいかに影響を受けたかについて、論考をまとめて発表した。

ワイルドの評伝を一般読者に読みやすく興味深い読み物として提供するという目的を果たした結果、一般の商業雑誌からもワイルドを紹介する原稿依頼が来たり、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』の舞台化のパンフレットの執筆依頼なども来ており、この成果の余波が現在も続き、ワイルドを世に広く知らしめることにいくらかでも貢献できたかと思っている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

1. 宮崎かすみ  
「オスカー・ワイルド初期のウィタ・セクスアリス」『和光大学表現学部紀要』(査読有)第12巻、2012年、pp.149-167.
2. 宮崎かすみ  
「『明暗』における二項対立構造 超克の可能性を読む」『和光大学表現学部紀要』(査読有)第14巻、2013年、pp.150-165.
3. 宮崎かすみ  
「私は作品にはオしか注がなかったが、人生には精魂を込めた」『メンズ・プレシヤス』2014年秋号、小学館、2014年、pp.74-75.
4. 宮崎かすみ  
「「身代わりの文学」 オスカー・ワイルドから夏目漱石の『心』へ」『和光大学表現学部紀要』(査読有)第15巻、2014年、pp.113-130.

〔学会発表〕(計 3件)

1. 宮崎かすみ  
「『明暗』をジェンダーから読むー救済の可能性と二項対立の止揚」和光大学文学会、於：和光大学、2011年10月29日、招聘講演。

2. 宮崎かすみ  
「オスカー・ワイルドとその時代」日本キプリング協会、於：学習院大学、2014年3月22日、招聘講演。

3. 宮崎かすみ  
「ワイルド裁判の歴史的位相」日本ワイルド協会、於：青山学院大学、2014年11月29日、招聘講演。

〔図書〕(計 2件)

1. Kasumi MIYAZAKI, Valorizing Samurai Masculinity through Biblical Language:Christianity, Oscar Wilde and Natsume Soseki 's *Kokoro*, in WHAT IS MASCULINITY? Historical Dynamics from Antiquity to Contemporary World. Palgrave Macmillan, 2011, pp.370-388.
2. 宮崎かすみ『オスカー・ワイルド 「犯罪者」にして芸術家』中公新書、2013年、全297ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

宮崎かすみ (MIYAZAKI, Kasumi)  
和光大学・表現学部・教授  
研究者番号：10255200